

生まれ育ちはここではなかった。

彼女はそんなことを言つて、僕の視線から目を逸らす。いつかの約束と同じだった。

「どうして、君はここにいたのだい？」

僕は思わず尋ねたが返事が返つてくるとは思つていなかった。ずっと、知らなかったことがここにはあつたのだから。

だけど、彼女は何かを答えようと一生懸命になつて口に手を当てて、そつと口紅を塗る。柔らかい唇が朱く塗られた。

心はとうの昔に離れている。それぐらい、僕だつてわかっている。だけど、それでも。

彼女と居られる幸せを信じていたから。

だから、僕は彼女をずっと幸せにできれば、と。

叶わない願いだなんて、僕は思つてない。

叶うことのない願いだなんて、彼女も思つてない。

だからこそ、僕は聞きたい。

もう一度、尋ねた。

「どうして、君はここにいたのだい？」

彼女の唇が確かに開いた。そして、僕に告げる。

——と。

僕はその返事を聞いて安心した。そして、彼女に告げる。

「なら、これからは」

夜が明けると空はまだ梟が鳴いている頃だろう。だから、また鳥の姿でも見ようと、空を見上げて後悔した。

また、いられるのかな？

わからない。

僕たちはいつまでも、ここにいたいものだから。

僕はね？

これが思い出になるんなら。

とても。

良いことだと思うんだ——。

「さて、終わったことだし」

蒼い空が無駄にかっこいいと誰かが言っていた。雲が様々な形に変わり、光を遮る姿はとても美しかった。陽射しの差し込む部屋の中でそんなどうでもいいことを考えていた。

「ねえ、お父さん」

ん？ とベランダで掃除をしていたはずの娘が僕の見ている空をシャボン玉液で遮る。ぼわぼわと浮かんでいくシャボン玉がゆつくりと僕の目の前をいっぱいにしていく。綺麗な虹色が確かに輝いていた。

「どうした？ 僕の空を見たいからってそんな邪魔をしたら、世間はなんて言うだろうな」

「でた、世間の話なんかしてないのに、世間という言葉を使いたいおっさんが」

「おうおう、お前さんがこの娘を馬鹿にしたのかい？ まったく。これだから、妻と呼ばれる職業の人って言う人は」

「はいはい。ごめんなさいね。あなたの目の前に、道具が落ちたのよ」

そうか、と窓辺に目を移すと二つほどのシャボン液が入っている空き缶が転がっていた。音がしなかったのは恐らく、草が生えている場所に落ちたからだろう。

「それだけだったのか。まあいい。ここには全てがあるのだからなあ」

「何言ってるの？ お父さん。取ったら、おじいちゃんあげる」

「娘よ。意味不明なことを言ったら、お父さんから何が貰えるんだっけ？」

「拳骨及び罵倒」

「娘よ。お父さんをどう思っているんだい」

「いいからとれ」

「はい」

情けないわね、とサツシの後で頬に手を当てて笑っている妻を睨みながら空き缶を取った。ただ、中身がないことは言うべきだろうか迷ったが、ここは補充をしてやろうと思う。

「中身も入れておくよ」

「うん、ありがとう。お父さん、たまに優しくなるよね」

「何を言っている。いつもそうじゃないか」

「もう娘は聞いてないわよ」

「はっ！ 貴様、いつからこの背中に悪寒をなぞらせたのだ？」

「いいから。なんか、あなた宛てに郵便が届いていたんだけど」

「郵便？ なんか、僕やっただけ？」

「さあ？ とりあえず、出掛けてくるから。なんかあつたら、連絡入れてね」

「はいはい。いつてらっしゃい」

軽く手を振って、手元に赤いリストバンドがキラキラ光っていることに気付いた。僕の手元にいつの間に着けたのかはわからないが青いリストバンドがあった。妻も、綺麗なものが好きだったな、と赤い空を見ていた。

「郵便とはいえ、これは何なんだ？」

手元に、渡された郵便とやらを置く。誰かに頼んだわけでもなく、と言って自分の物ではないと否定するわけにもいかない。

「はて、これはなんやろか」

どこかの方言らしきものを呟きながら、包み紙を剥ぐと綺麗な紅い宝石が出て来た。陽射しにかざし、瞳に突き刺さる紅い光に変わる、それは僕の心の中にある思い出と被った。

「まさか、あいつがくれたとか……あるわけないか」

でも、どうしてここに宝石が現れたのか。それがわからない。いや、誰かが郵便で持ってきたからあるとかじゃなくて。

脳裏に色々とフラッシュバックさせるものの、思い出の中で輝く幼い頃のあいつの表情が浮かぶ。笑って、僕に大切なものだから、あげる、と言ってくれたことを。

「つてあれ？」

ここは？ と思つて、夜空を眺めている自分がいた。

「もう夜になったのか？ いや、まだ起きてばっかりだから、そんなことがあるわけもなく」

部屋の中を見渡そうとしたら、そんなことがあるわけもなく、部屋ではなく、どこかの大きな路地にある水色のベンチに僕は座っていた。というか、そこで夜空を眺めていた。

「君。そこは、私の席なんだけど」

「え？」

目の前には目くじら立てた金髪で碧眼のお姉さんが僕を睨んでいた。ちよつと怖いと思つたのはここだけの話だ。

「あ、すみません」

とりあえず、お姉さんの席らしいので僕は立ち上がり、ベンチから立ち上がり、どいた。お姉さんは特に僕を睨む以外に何もしない。僕はようやく周りを見渡し、思った。

ここは、どこだ？

紺色に染まる街景色に月光が突き刺さる頃、辺りがゆつくりと夜の帳が降りていった。

昔、彼女は言った。

私が、一緒に居てほしいって言ったから、あなたを選んだの。そのことに理由があるのかしら。

僕は答えようがなかった。でも、彼女と居られるのならと、思ったのは確かだった。

ここには何もないの。だから、夢を追いかけるのは私だけの勝手な話じゃないかしら。だから、あなたも来てほしい。そう言っている。

でも、僕は故郷が好きなんだ。離れるのと、彼女と居られることに天秤で測れない。だから、僕は言った。

いつか、必ず帰れるのなら、君と居てもいいかもしれない。

そう、と少しだけ哀しそうな瞳をして、涙をわずかながら流していた。

ありがとう。そんな、一つのことを大切にしてくれる人が私の周りにいたんだね。

そう言ってくれた。そして、嬉しいから涙を流しているのか、それとも哀しいから涙を流しているのか。

今の僕にはわからなかった。

だけど、その後の彼女は。

笑っていた。

僕は、それだけで十分だった。

だから、彼女と一緒に居よう。

素直に思った。